

## 特撮ツーリズム現象の歴史的な変遷 — 知的財産を用いた観光学研究の視点から —

○二重作昌満[東海大学大学院文学研究科文明研究専攻]・田中伸彦[東海大学観光学部]  
キーワード：特撮ツーリズム 歴史 キャラクターコンテンツ 知的財産 観光学研究

### 1. 背景

我が国が 2003 年に、「観光立国」宣言を行って以降、観光立国推進基本法が 2006 年に成立した。さらに、2008 年 10 月の観光庁が設置される等、国内で急速に観光活動を視野とした法整備や推進計画の策定が進んでいった。その一方で知的財産に着目すると、2002 年に、知的財産の保護を視野とした知的財産立国が国家戦略として打ち出され、知的財産基本法が成立した。上記の経緯の中で観光と、知的財産であるコンテンツが結合を開始していくのは、先述した観光立国推進基本法が 2006 年に成立し、翌年 1 月 1 日に施行されて以降のことである。

また 2007 年に、国土交通省総合政策局より『日本のアニメを活用した国際観光交流等の拡大による地域活性化調査報告書』が発表された。当調査では日本製のマンガやアニメ等のコンテンツを外国人が日本を訪れる際の魅力要素の 1 つとし、これらを観光面での誘客魅力として活用していく方策と、それらを目的に日本を訪れる海外からの観光客のニーズに応えうる体制を整えていく必要性が示された。しかし、これら政策対象のコンテンツという枠組みの中に、当研究にて取り扱う「特撮」について言及はされていない。

国内の一映像コンテンツである「特撮」の研究において、特撮映像作品を用いた観光現象の確立や変遷を調査した研究は確認することができない。また「特撮」は 2013 年 3 月時点での「文化庁メディア芸術祭」の規定においても、映像ジャンルとして確立されていない。これらの現状から、「特撮」を用いた観光現象による国民の娯楽活動の歴史や推移を概観、検証することができない状況となっており、今後の我が国でのコンテンツツーリズム研究の発展を展望していく上で障害となっている。

そこで当研究では、知的財産を用いた観光学研究の視点から、これら「特撮」映像作品を用いて、特定の観光地へ人々を誘致する観光現象を「特撮ツーリズム」とした。そして、当現象の歴史に着目し、映像コンテンツを用いた観光現象の発展と推移について検証した。

### 2. 研究の目的・対象・研究方法

当研究の目的は、知的財産を用いたコンテンツツーリズム研究の視点から、特撮映像作品を用いた観光現象である「特撮ツーリズム」の歴史を調査し、その発展と推移を解明することである。特撮ツーリズムの題材となっている特撮映像作品は、半世紀に渡って子ども達を対象に発信されている長寿コンテンツである。そこで、特撮ツーリズムがこれら特撮映像作品の歴史の中でいつの時代に出現し、現象としてどのように日常の中に浸透していったかの経緯を明らかにした。

本研究では資料調査において現象の歴史の検証という方法を行った。調査対象は、まず 1964 年から 2016 年 8 月 31 日までの期間中に催された特撮イベントや、特撮映像作品を題材とした商業施設を記録した資料を対象とした。調査の中で収集した資料は以下 3 つの型に分類した。

まずは特撮イベント開催当時の写真やその模様を文章として収録した「1.文献」、特撮映像作品を用いて地域振興を行っている地域や常設施設が公式に開示している「2.Web サイ

ト」、また特撮ツーリズムが開催されていた当時の模様を、映像として収録したビデオやDVD等の「3.映像ソフト」の3種類を調査資料として活用した。

3種類の調査資料の後に、各資料に記録されている写真や文章、映像での情報を一つ一つ検証した。これら資料から得ることができる全ての情報を総括することで、各映像制作会社から展開されてきた特撮ツーリズム現象の歴史を一つにした。

### 3. 特撮ツーリズムの歴史

資料調査の結果、「特撮ツーリズム」は50年以上の歴史を有し、また各年代において様々な観光形態が出現してきたことが判明した。そこで、特撮ツーリズムの歴史を下記5つの時代に分類できることが明らかになった(表1)。以下にその歴史の変遷を概観する。

表1. 特撮ツーリズムの歴史

年代	時代名	各年代を象徴する出来事
1960年代	特撮ツーリズム 草創期	展示型イベントの開催
1970年代	常設施設開放期	アトラクションショーの常設化
1980年代	恒例イベント創造期	毎年恒例イベントの開催
1990年代		期間限定商品の販売開始
2000年代	地域振興誕生期	「特撮」を観光資源としたまちづくりの活性化
2010年代	現象50年期	「特撮」と企業や地域観光局と提携による誘致

#### ①1960年代：特撮ツーリズム 草創期

1960年代は国内初の怪獣ショーの開催や、ヒーロー、怪獣とのサイン会が催されていた。しかし、1960年代の特撮ツーリズムは展示が中心であり、ステージ形式のショーの活性化は1970年代に突入してからのことであった。そこで、この時代を現象の初期段階として、「特撮ツーリズム 草創期」とした。

特撮ツーリズム現象最古の事例は、1964年に11月に池袋のデパート屋上にある「子供遊園地」において開催された怪獣ゴジラのショーであった。これは、東宝の特撮怪獣映画「ゴジラ(1954)」シリーズにおいてゴジラを演じた着ぐるみ俳優、中島春雄がゴジラの「着ぐるみ」を着用し、自動車や電車の模型を叩きつけるという実演的なものであった。

この催しが開催された後、円谷プロ製作の特撮怪獣番組「ウルトラQ」の1966年1月2日の放映開始と共に、子ども達を対象とした社会現象である「第一次怪獣ブーム」が国内で隆盛を極めるようになった。当ブームを受けて、国内各地で怪獣の着ぐるみの展示等や怪獣ショーが頻繁に開催されるようになった。

このようにデパートや商店街、遊園地などのイベント会場を怪獣が練り歩くことから始まった怪獣の実演ショーは、やがて舞台上で怪獣達が司会者と絡んだり、怪獣同士が小競り合いをする等、次第にショー内容が変容を遂げていくようになった。

こうした中で、1966年7月9日に杉並公会堂において「ウルトラマン前夜祭」が開催された。当イベントは舞台イベントのスタイルで中継録画された。その翌日の7月10日に放映された「ウルトラマン前夜祭」は、視聴率34%という高視聴率を記録した。

#### ②1970年代：特撮ツーリズム 発展期

1970年代は、当年代前半に東映製作の特撮ヒーロー番組「仮面ライダー(1971)」の放映開始によって国内で巻き起こった「変身ブーム」により、「特撮ヒーロー」を主役としたアトラクションショーの台頭が目覚ましかった。こうした特撮映像作品と地域施設との提

携及び現象が常設化した背景を踏まえ、当研究では「特撮ツーリズム 発展期」と呼称した。

先述した「変身ブーム」の影響を受けて、「特撮ヒーロー」を主役としたアトラクションショー専用の常設施設が国内で次々に設置されるようになった。その中でも後楽園内の「後楽園ゆうえんち野外劇場」は、「仮面ライダー（1971）」をはじめとする仮面ライダーシリーズのアトラクションショーが行われた。1975年には、同じく東映製作の特撮ヒーロー番組である「秘密戦隊ゴレンジャー（1975）」の放映が開始された。本作品の放送開始と並行して、後楽園内での仮面ライダーシリーズのショーは「秘密戦隊ゴレンジャー（1975）」をはじめとするスーパー戦隊シリーズを中心としたショーに内容を変更した。このスーパー戦隊シリーズのショーは1975年の初開催以降、同施設において45年以上に渡って継続される人気イベントとして定着した。

また円谷プロは、「帰ってきたウルトラマン（1971）」の放送開始と共に、二子玉川園と独占契約を結んだ。同園にはウルトラマンシリーズの展示館の設置や屋外イベントが開催された。さらに二子玉川園の宣伝ポスターには「怪獣ランド・二子玉川園」とするなど、両社のイベントを通じた結束が強化されていった。また、独占契約から3年目を迎えた「ウルトラマンタロウ（1973）」放送期間中の1973年4月22日（日曜日）には、これまでヒーローに倒された怪獣達への黙祷を趣旨とした「怪獣さん安らかに 怪獣供養祭」が1日だけ開催された。会場には2,000人の人々が集まる等、二子玉川園内で開催されたイベントの中でも、非常に大きな催しとなった。

### ③ 1980・1990年代：恒例イベント創造期

1980年代・1990年代に入ると、特撮ツーリズムは夏休み期間中の毎年恒例イベントが開催されるようになった。さらに、イベント会場でしか購入することのできない限定商品の販売開始など、「商品」を対象とした観光形態が初めて確認できるようになった。そこで、これらの時代を一括りに、「恒例イベント創造期」とした。

この時期に誕生した恒例イベントの代表例として、1989年に池袋サンシャインシティ文化会館4階にて「ウルトラマンフェスティバル」が初開催された。当イベントは以降25年以上に渡り（1992年と1996年を除く）長期的に開催される夏休み恒例イベントとなった。

さらに先述したイベント会場でしか購入することのできない限定商品がはじめて導入されたのは、1990年の三井グリーンランドであった。同施設において巨大なウルトラマンとバルタン星人のモニュメントが設置されたのを記念し、両者の限定ソフトビニール人形（株式会社バンダイ製）が販売された。限定商品を観光目的とした人々の誘致は、先述した「ウルトラマンフェスティバル」においても1995年から導入された。このように、商品を対象とした観光形態も、特撮ツーリズムの一形態として認識されるようになった。

### ④ 2000年代：地域振興誕生期

2000年代に入ると、特撮映像作品と地域振興が一体となったまちづくりによる地域振興が国内各所で点々と確認できるようになった。こうした事例は2000年代初頭に東北地方に集中していた。「特撮映像作品の製作者の生誕地」もしくは「ゆかりのある地」として、各所で観光地域振興を行う事例が確認できたため、この年代を「地域振興誕生期」とした。

まず、2000年7月20日に東映の仮面ライダーシリーズの原作者である石ノ森章太郎の故郷である宮城県登米市中田町での「石ノ森章太郎ふるさと記念館」の開館や、同県石巻

市において 2001 年 7 月 23 日に「石ノ森萬画館」が開館した。また、ウルトラマンシリーズを製作した円谷プロの創立者である円谷英二の生誕の地、福島県須賀川市では、円谷英二が生誕 100 周年を迎えたことに伴い、「2001 円谷英二生誕 100 年記念プロジェクト」の企画から、須賀川市らが主催で「生誕 100 年円谷英二展」が開催された。

#### ⑤2010 年代 現象 50 年期

2010 年代に入ると、特撮シリーズは国内最初の現象が開催されてから 50 年以上の時間を有することとなった。またこの年代では、円谷プロのウルトラマンシリーズと特定の企業（飲食店や地域観光局）との提携事例が数多く確認できるようになった。

そこで、当研究ではこの年代を「現象 50 年期」とした。

2016 年に円谷プロのウルトラマンシリーズが放映開始 50 周年を迎えたことを記念し、同年 7 月 9 日と 7 月 10 日には、「ウルトラマンの日 in 杉並公会堂」が開催された。50 年前に先述した「ウルトラマン前夜祭」を行った杉並公会堂を舞台に、「ウルトラマン（1966）」の出演者、監督によるトークショーでの「ウルトラマン前夜祭」の様子の振り返りや、歴代 43 人のウルトラマン達の全員集合等、50 年という長期的な節目を生かしたイベントが開催された。

#### 4. 研究の現状と課題

当研究調査から特撮シリーズの歴史を概観した結果、特撮映像作品から派生したシリーズ現象である特撮シリーズは、最古の事例である 1964 年以降、約 50 年以上に渡って観光現象が持続していた。また、半世紀に渡る歴史の中で、多種多様な観光形態を増加させてきたことも判明した。こうした歴史的検証から、円谷プロのウルトラマンシリーズのように、一つのキャラクターコンテンツ（知的財産）が観光現象として半世紀以上継続させることが可能であることが、当現象の検証から確認できた。

今後も当現象はキャラクターコンテンツの発信に併せてさらなる発展、拡大が見込まれるため、今後の動向の確認を継続していくことが重要である。

#### 参考文献

国土交通省総合政策局（2007）「平成 18 年度国土施策創発調査 日本のアニメを活用した国際観光交流等の拡大による地域活性化調査報告書」 pp.1-23

平成 24 年度メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業（2014）「日本特撮に関する調査」 森ビル株式会社 pp.1-143

田神健一 佐藤慶幸（2016）「ゴジラ 全映画 DVD コレクターズ BOX VOL.4 復刻パンフレット」講談社 pp.13

新名新（2012）「総天然色 ウルトラ Q 公式ガイドブック」角川書店 pp.141-142

秋廣泰生（2016）「ウルトラマンの日 in 杉並公会堂」TBS テレビ、円谷プロダクション pp.1,7

中西一雄（2016）「オール・ザット ウルトラマンタロウ」株式会社ネコ・パブリッシング pp.76,77

廣瀬和吉（2003）「円谷プロトリビュートマガジン ウルトラマン AGE vol.10」辰巳出版 pp.102

廣瀬和吉（2001）「円谷プロトリビュートマガジン ウルトラマン AGE vol.2」辰巳出版 pp.61-62